

すてきなあなたへ

編集 佐倉市宮ノ台女性井戸端会議

発行 佐倉市宮ノ台4-26-8 tel&fax043-461-7004

私が都市計画見直し素案に反対する理由は次の通りです

—8月19日、公聴会の公述原稿から—

＜井野東、第4工区の用途地域の変更（マンション用地への変更）＞について

私は1994年（平成6年）7月に宮ノ台に越してきました。

当時の宮ノ台は、周りが緑に囲まれ、地域の人達が大切に守っている鎮守の森があり、住宅地の外側には先崎の田園風景、小学校、中学校では子どもたちが広い校庭で、のびのびと学校生活を送っていました。北部調整池の周りの雑木林の昆虫採取、野鳥の観察。名前を知らない植物を見つけては図鑑を開いて調べる。子どもたちが肌で感じ、触れ合える自然がありました。豊かな緑と雑木林の生き物たちと共生できる生活環境が自慢でもありました。

しかし、宮ノ台の環境は年々変わってきました。周りの緑は、ここ数年で無残にも消し去られてしまいました。住民の意思を無視して緑を消し去り、自然を破壊する開発を勝手に行われて良いのでしょうか。北部調整池はまったく人工的な公園に変貌してしまいました。私たち周辺住民は、このような人工的に美化された環境を望んではいません。むかしから育まれてきた自然を破壊して作った人工的な公園、こんなものは都会にいくらでもあります。

私が今の家を購入したとき、この土地を勧めた山万の宣伝文句は「緑豊かな住環境で子どもを育てるのに最適」というものでした。12年間の変貌は、その言葉を裏切るものでした。

井野東第4工区（新都市交通の中学校駅東側）に関して、2001年（平成13年）には「宮ノ台の緑を守る会」が415名の署名をもって、こうした開発を自粛するよう佐倉市長に要望を出していました。その後、こうした住民の意思を無視して、開発業者の事業を放任している市の行政に怒りを感じます。

2005年（平成17年）3月に井野東第4工区に、突然、しかも周辺住民になんの通知も無く、現在の都市計画道路より最大7.3メートルの盛り土が現れました。時を同じくして、佐倉市より「井野東地区用途地域・高度地区の変更(案)」の知らせが宮ノ台3・4・5丁目自治会連絡長に届いたのはどういう関連性があるのでしょうか。

前年2004年10月に井野東土地区画整理事業の工区内土砂搬出によるダンプトラックの運行の説明会では、第4工区では土砂の搬出だけである、搬出の理由として、既存の住宅地と同等の土地、バリアフリーの平らな土地を造成するとのことでありました。しかし、でこぼこな土地を平らにするどころか、常識を超えた6メートル以上の土盛りをし、近隣住民に閉塞感と圧迫感、精神的苦痛を与えています。住民に対して説明した組合の、業務代行の山万のこういう不誠実な言動は、ますます不信感を助長しています。

＜井野南、全都市街化区域への変更＞について

私の知人で井野南の地権者の方が先日亡くなりました。4月23日の「都市計画見直しに係る説明会」で会ったのが最後となりました。この方は、長年この井野南の区域に住み、息子さん家族と同居し、将来もここで平穩に暮らしたいと切望しておりました。私は遺族の方から、自分たちの切実な思いを、千葉県・佐倉市に届けてほしいと頼まれました。この都市計画に反対してこられた方です。この方以外にも、反対している地権者の方は、「組合方式」で開発することに対して不安を感じています。反対しているにもかかわらず、なぜ組合に入らなければいけないのか、これからの生活の変化を危惧しております。市街化調整区域から市街化区域への変更案は、4月23日の説明会の知らせと同時に、やはり突然、住民側に届き、非常に驚いたようです。

ディベロッパーの山万が半分以上の土地を所有し、多くは不在地主である地権者の3分の2以上の賛成を得ているからと1999年(平成11年)「井野南土地区画整理組合準備会」を強引に立ち上げました。現在暮らしている人々の権利を切り捨てるような開発を行政は断じて許してはいけません。佐倉市と佐倉市には誰のための都市計画なのかを再認識し、この計画を撤回していただきたいと、強く要請いたします。(G)

8月19日、都市計画見直し公聴会開催—圧倒的に多かった、見直し反対意見

8月19日(土)、市役所社会福祉センター3階の会場はものものしく、千葉県・佐倉市の都市計画関係の担当者10人以上が並ぶ。公述人は15人、公述時間は一人10分。私たち10人は、事前に情報交換はしていたものの、どんな公述になるのか楽しみでもある一方、自分の公述が終わるまでは落ち着かない。今回の見直し素案反対の理由や現況の受取り方もまさに十人十色、力が入っていた。あとの5人は、井野南関係で、素案推進派の3人の理由は紋切り型で短いのが特徴。ちなみに私の反対理由は、見直し素案は千葉県が掲げる少子高齢社会の開発理念「安心・快適・防災」にことごとく逆行するからである。井野東土地区画整理組合の杜撰な資金計画の尻拭いにはかと思えない公的資金投入。公共施設管理者負担金の算定根拠となる不動産鑑定「談合」に近い実態。盛り土崩落、産廃処理、急勾配の跨線橋などへの組合・業務代行山万・行政の対応は不信感を募らせている。さらに、この見直し案が近く審議される千葉県都市計画審議会の会長が、業務代行山万の「わがまち」や広告・イベントにやたら登場する某大学T教授なのである。公平性はどう保たれるのか。法令違反の疑いもあるのではないか。ここまで、持ち時間10分を少し超えた。なお、全員の公述要旨は、千葉県・佐倉市のホームページ読むことができる(M)

~~~~~◇速報◇ 宮ノ台の真ん中に土石流?!~~~~~

9月26日(火)の夜10時過ぎ、宮ノ台3・5丁目境の歯科医院前の十字路口に宅地造成現場から土石流が流れ込んだ。足元は土砂と泥水でズブズブの状態。5丁目側の坂道をのぼると石や土の塊が散乱、工事用の赤いコーンや側溝のフタも押し上げられたのか、散らばっていた。

折からの激しい雨のなか、土石流の跡をさかのぼれば、井野東第2工区、北東の角の低地だった。造成用の土砂の山が大きく削られていた。積み上げている矢先の土嚢の脇から泥水が噴出しているのではないかと。事情を聞きたいが、組合・山万・建設関係、行政の人たち一人として見つからない。ようやく山万のSさんと遭遇。造成工事の安全性を問題にしていた矢先である。起るべくして起きた土石流、工事費圧縮がこんな形であられるのか。翌朝、犬の散歩で、現場へ行く。ご近所の話では、散水車3台がきて、朝方まで道路やガレージなどを洗い流していたという。

菅沼正子の映画招待席 20

サラバンド

—生きることは芸術であり芸術とは生命の爆発か—

さすがベイルマン監督。作品の重厚さに圧倒される。まるで神の咆哮のようだ。60年代から巨匠として君臨しているベイルマン監督が、85歳を過ぎてなお作り得た傑作。テーマは家族の憎悪と〈生〉。人間の業の深さをとことん暴いて強烈。ベイルマンにとって、いや、頂点を極めた人にとって、人生はこんなにも激しく壮絶なものなのか。

30年前に離婚した妻マリアン（リヴ・ウルマン）がナビゲーターになり、テーブルに山積みされた写真を前に観客に語りかけ、何かにつき動かされたように元夫のヨハン（エルランド・ヨセフソン）を訪ねることで映画の内容に入っていく。そこで語られる数々、父と息子の確執、息子と孫娘の関係、近親相姦、オディプス・コンプレックスの変形など三世代に渡る家族の愛憎劇。監督自身を彷彿させる物語の布陣である。ちなみに74年の「ある結婚の風景」は弁護士のマリアンと医師のヨハンの、一見平穏で円満そのものにみえた夫婦関係に亀裂が生じ、崩壊するさまをリアルに描いた作品。この「サラバンド」はそれからの30年後を設定し、同じキャストで元夫婦の枯れた関係を描いている。

大学教授だったヨハンはまだ85歳。スウェーデンの森と湖に囲まれた美しい自然の中で悠々自適の隠遁生活をしているものの、人を寄せつけない厳しさがある。60を過ぎた息子は近くに住んでいるが、ほとんど没交渉。たまに訪ねてきても遺産の前借りという浅ましき。この息子はかつては高名なチェリストであり、元大学教授。孫娘は前途を嘱望される音大受験生。父親の特訓を受けて受験曲にしているのがサラバンド中でも有名なバッハの無伴奏チェロ組曲第5番。父娘が向き合ってチェロを練習するシーンは、言葉を持たない激しい対話のようだ。

このようにはた目にはリッチに成功している家族なのに、その内側は亀裂だらけ。骨肉の争いのような醜さを露呈していく。

驚くのは父と息子の憎悪の深さ。「なぜそんなに僕が憎い？」と問う息子に父は「憎んではない、私にとってお前は無だから。存在すらしない」と。こんなきつい言葉を突き付ける父親がいるだろうか。自分に似ていると気付いたときから嫌いになったというが、それは自分への憎悪にはほかならないのだ。だからヨハン自分の人生をクソだったと述懐する。そこに、極限まで自分を追いつめて、激しく〈生〉を追求する姿がある。

このヨハンの激情を包み込むのは最終的にはマリアンの懐だ。ある夜失禁したヨハン「精神が下痢をした」と全裸になり、マリアンのベッドに入る。老いの醜態を何のてらいもなくさらけ出すこのシーンこそ、監督の製作の狙いだらう。

(10月21日より渋谷ユーロスペースにてロードショー)

オランダ、夏の思い出—あのゆったりとした暮らしぶりは・・・

8月末、友人とオランダを旅行した。友人の夫が長期出張でハーグに滞在していて、そのアパートメントに泊めてもらっての1週間だった。

スキポール空港からオランダ国鉄でデン・ハーグ駅まで、トラムに乗り換え北海に面するスヘフェニンヘンのクアハウスに近い駅で降り、アパートメントに向かった。オランダの国鉄には改札口がなく、窓口で切符を買い時刻表と発車番号を見て乗る。トラムは回数券を窓口で買い、車内にある機械で印字する。1日に数回車掌さんが調べに来るので、不正はあまり無いらしい。今回、3人で17世紀の繁栄と面影を残す美しい運河の街を訪ねた。

画家フェルメールと陶器の街デルフト、大学とシーボルトの家のあるライデン、古い運河のある中世の街ユトレヒト、皇太子一家が静養していた古城に近いアペルドールンのヘット・ロー宮殿、チーズの取引で栄えたゴータ、観光客であふれるアムステルダムには2日かよった。すべて電車で移動したが、通勤時間帯でも快適であった。ゆったりした車内に大きな座席、スーツ姿のビジネスマンがハムサンドのパンを食べながら新聞を読んでいる。オランダの人は女性も男性も、車内、路上のどこといわずよくものを食べる。それがまたおいしそうできまっている。

どこまでも続く水路で区分けされた牧場、柳が運河の水面に垂れ、美しい花々で囲まれた家々も印象的であったが、デルフトの新、旧教会の床にはめ込まれた墓石の多さには圧倒された。その中には歴史上の人物も眠っている。そして、ユトレヒトのドム教会を訪ねた時のこと、ドム塔と教会は今は別の建物になっているが、元は同じ建物で1568年の嵐により破壊されて今のようになったと説明されてあった。しかし、図を見るとどう見ても戦いによる爆破である。オランダは、スペインから独立するときに北部7州がユトレヒト同盟を組む、スペインと戦っている。この独立戦争にはカソリック、プロテスタントの勢力争いも絡んでおり、新教側が破壊したことを公言できないのかなと思った。

長い戦争や宗教的対立を乗り越えて、東インド会社のアジア貿易で驚異の繁栄を成し遂げたオランダ。あのゆったりとした暮らしぶりはやはり過去の遺産の蓄積から来るのかなとうらやましく思った。(H)

防災倉庫・井戸のはなし

—井野中にあるのを知っていましたか—

11年前の阪神大震災を教訓として行政では各種対策を行っている。その一つに避難場所への防災倉庫・防災井戸の設置がある。数年前、井野中で、年1回の点検を見学させてもらった。防災倉庫の内容が数はともかく種類が充実している事や自家発電で水を出す防災井戸がある事を心強く思った。ところが、最近、防災地図をみてびっくり。倉庫はどの避難場所にもあるが、井戸は全市で9ヶ所。志津地区には井野中を含め、2ヶ所しかないのだ。交通防災課の災害対策班に問い合わせてみると、倉庫と井戸のセットで設置する予定だったが、費用等を考え井戸はとりあえず中学校区に1ヶ所と地域防災集会所に設置することを目標にしているそうだ。地震によっては井戸が機能しないこともあるので、全面的に頼るのは危険だが、折角の井野中の設備を災害時に使いこなせるような準備が必要だ。防災訓練でまだ使用した経験はないが、防災井戸を使った訓練がしてみたい。(K)